

高校生の内的作業モデルと入学時の学校適応

著者	粕谷 貴志, 大谷 哲弘
雑誌名	奈良教育大学紀要. 人文・社会科学
巻	65
号	1
ページ	163-168
発行年	2016-11-30
その他のタイトル	The Relationship between Internal working Models and Adaptation in New Senior High School Students
URL	http://hdl.handle.net/10105/11044

高校生の内的作業モデルと入学時の学校適応

粕谷 貴志 奈良教育大学大学院 (教職開発専攻)
大谷 哲弘 岩手大学大学院 (教職実践専攻)

The Relationship between Internal working Models and Adaptation in New Senior High School Students

Takashi KASUYA

(Department of Professional Development in School, Graduate School of Education, Nara University of Education)

Tetsuhiro OTANI

(Division of Professional Practice in Education, Graduate School of Education, Iwate University)

Abstract

The purpose of this study was to examine relationship between “Internal Working Models” and adaptation in new senior high school students. The survey was conducted among 577 senior high school students. First, a scale to measure students’ “Internal Working Models” was conducted and examined. Results of factor analysis showed that senior high school students’ “Internal Working Models” were composed of 3 factors of 17 items. The reliability of the scale was examined through Cronbach’s α . Second, the relationship between the “Internal Working Models” and adaptation were examined. Results showed that the students’ “Internal Working Models” was related to their adaptation. These results suggested that in case of maladapted senior high school students, psycho-educational intervention is required while paying attention to their “Internal Working Models”.

キーワード：学校適応感, 内的作業モデル, 高校生

Key Words : adaptation, “Internal Working Models”,
senior high school student

1. 問題と目的

文部科学省の調査(2014)によると、平成25年度の高校生の不登校生徒数は、55,657人(1.67%)であった。高等学校の不登校生徒数は、最近10年間、5～6万人台で推移しており、在籍生徒数に対する割合は1.5%～1.8%台と深刻な状況が続いている。平成25年度の調査では、不登校生徒のうち中途退学に至った者は16,454人(29.6%)であり、高校生の不登校は中途退学につながる可能性のある問題でもあることが示されている。また、学年別で見ると1年生での不登校生徒数が14,928人と最も多く、中途退学者数も1年生が21,847人と最も多い状況である。高校生の不登校、中途退学の問題は、入学時からの早期の対応が求められているといえよう。

高等学校の入学時における不適応問題は、それまでの環境を離れ新しい環境に入る「環境移行事態」(environmental transition)と呼ばれ、新しい環境へ

の適応過程や適応に影響する要因の検討が行われている。小泉(1992)は、人間一環境相互交流論(Wapner, 1973)の観点から、生徒が学校環境をどのように認知して意味づけているのか、さらにその個人差が学校環境においてどのような意味を持つかの視点の重要性を指摘している。粕谷・小野寺・大谷(2006)は、高校生の入学時の対人関係についての認知、学校への親和傾向や期待、不安傾向などが適応状態と関連していることを指摘している。高校生の不適応問題は、入学時から生徒の学校生活についての認知に注目して対応を工夫する必要があると考えられる。

一方、内的作業モデル(Internal Working Models, 以下、IWMと表記)は、Bowlby(1973, 1980)によって、愛着に関する表象モデルとして提唱された。IWMとは、愛着対象との具体的な経験の中で形成された愛着対象への接近可能性や愛着対象の情緒的応答性に関する表象および自分の他者への働きかけの有効性に関

する表象モデルである。内在化されたIWMは、他者と自己の関係についての各個人が有する認知的枠組みとしてはたらし、対人的出来事の解釈や知覚、未来の予測、行動のプランニングをすると仮定され、生涯にわたって個人の認知構造に影響を与え続ける可能性が指摘されている (Bowlby, 1988)。

五十嵐・萩原 (2004) は、中学生を対象として、回想法により得られた幼少期の親へのアタッチメントタイプと不登校傾向との関連を指摘している。また、粕谷・河村 (2005a) は、中学生のIWMを測定し、安定型である場合、スクール・モラルが高く学校適応が良好であることを指摘している。IWMの個人差が、学校適応と関連する可能性を示す知見が示されており、高校生においても学校適応への援助を考える上で、IWMの個人差に注目することは意味があると考えられる。

本研究では、高校生の学校適応への心理教育的援助の視点を得るために、IWMに注目して高校入学時の適応感との関連を検討することを目的とした。

2. 方法

調査対象

A県の公立高等学校5校に通う高校1年生614名(男子286名, 女子328名)であった。

調査時期および手続き

入学時からおよそ1ヶ月後の5月上旬から下旬に、各学級で担任が以下の内容から構成された質問紙を配布し、回答を求めた。

質問紙構成と内容

フェイスシートには、学校生活の事柄について尋ねる旨を示し、調査は学校の成績とは無関係であることを記載した。質問紙は、学年、性別の回答欄のほか、以下の質問項目を用いた。

(1) IWM尺度

Hazan & Shaver (1987) の愛着の分類の記述およびそれをもとに作成された詫摩・戸田 (1988) の成人用IWM尺度を参考にして、高校生のレベルに合わせた表現になるように表現を修正し、調査項目を作成した。それらを心理学を専門とする研究者2名と大学院を修了した高校の教師1名で協議し、30項目を選定して質問紙を作成した(安定:10項目, アンビバレント:10項目, 回避:10項目)。回答は「あてはまる」(4点)「ややあてはまる」(3点)「ややあてはまらない」(2点)「あてはまらない」(1点)の4件法であった。

(2) 高校入学時適応感尺度

粕谷・小野寺・大谷 (2006) の作成した高校入学時適

応感尺度を用いた。この尺度は、高校入学1年以内の長期欠席生徒、中途退学者にみられる学校不適応理由をリストアップして質問項目が構成されており、関係回避(「友だちと一緒に頑張って勉強や遊びのグループをつくるのはいやだ」「友だちとの付き合いがめんどくさいと思う時がある」など4項目)、学校生活への親和・期待(「この学校に対して親しみを感じる」「学校での勉強は、将来の生活や職業に役立つと思う」など4項目)及び、不安(「授業についていけないのではないかと不安になることがある」「友だちと一緒にいかにをしなければならぬとき、上手く協力できるかどうか不安になる」などの4項目)の3因子が確認されている。回答は「あてはまる」(4点)「ややあてはまる」(3点)「ややあてはまらない」(2点)「あてはまらない」(1点)の4件法であった。

3. 結果

IWM尺度と高校入学時適応感尺度の検討

有効回答は、577名(男子266名, 女子311名)であった(有効回答率94.0%)。無効回答は、調査実施日に欠席していた生徒の未回収分と、項目の一部に回答のないもの及び、全項目に同じ選択肢を回答するなど著しく偏った回答をしているものであった。

IWM尺度の有効回答者577名のデータをもとに、下位構造を検討するために全20項目を対象に因子分析(主因子法, バリマックス回転)を行った。4因子以降の固有値が1より小さくなったため、3因子解が適当と判断した。20項目のうち、共通性の最終推定値が.25以下の項目と因子負荷量が複数の因子間に.40以上を示したものを除き、再度因子分析を行った。その結果、17項目の3因子構造であると判断され、それぞれ安定因子、アンビバレント因子、回避因子と考えられた(表1)。下位尺度毎に、Cronbachの α 係数を求めたところ、「アンビバレント」下位尺度では.774、「安定」下位尺度では.771、「回避」下位尺度では.776であり、一定の内的整合性が確認された。各下位尺度ごとに項目の得点を合計してそれぞれ安定得点、アンビバレント得点、回避得点とした。各得点の平均と標準偏差を算出し、性差の検討をおこなった(表2)。その結果、安定得点、アンビバレント得点、回避得点の全てにおいて性別の効果が有意(安定得点: $F(1, 575)=6.27 p<.05$, アンビバレント: $F(1, 575)=8.53 p<.01$, 回避: $F(1, 575)=12.79 p<.01$)であり、安定得点とアンビバレント得点は男子より女子の得点が高く、回避得点は女子より男子の得点が高い結果であった。

高校入学時適応感尺度について、先行研究(粕谷・小野寺・大谷, 2006)に従い下位尺度ごとに項目の得点

を合計して、それぞれ関係回避得点、親和・期待得点、不安得点とした。平均と標準偏差を算出し、性差を検討した(表2)。その結果、関係回避得点と不安得点において性別の効果が有意(関係回避： $F(1, 575)=11.85$ $p<.01$ ，不安： $F(1, 575)=9.53$ $p<.01$)，親和・得点において有意傾向($F(1, 575)=2.84$ $p<.1$)であり、男子より女子が高い傾向が見られた。

IWM各下位尺度得点及び、高校入学時適応感尺度の関係回避得点、不安得点に性差が見られたため、以後の分析は男女別におこなった。

IWM下位尺度と入学時適応感との関連

IWMと入学時の適応感との関連を検討するために、個人内の要因としてのIWM尺度の各因子と高校入学時適応感の各因子との関連について検討した。具体的には、IWM尺度の下位尺度得点と高校入学時適応感尺度の下位尺度得点の相関を男女別に求めた(表3)。その結果、男子においては、安定得点が親和・期待得点と

弱い正の相関(.316)，アンビバレント得点が関係回避と弱い正の相関(.316)及び不安得点に中程度の正の相関(.619)，回避得点が関係回避得点と弱い正の相関(.334)がみられた。また、女子においては、安定得点が親和・期待得点と弱い正の相関(.277)，関係回避得点及び不安得点と弱い負の相関(-.363, -.211)，アンビバレント得点が不安得点と強い正の相関(.725)，回避得点が関係回避得点と弱い正の相関(.344)が見られた。

IWMタイプと高校入学時適応感との関連

次に、個人特性としてのIWMタイプと入学時の適応感との関連を検討するために、IWM尺度の各下位尺度の得点をもとにしてIWMタイプを4タイプにカテゴリー化した。方法は、粕谷・河村(2005b)によった。具体的には、①「安定型」：安定得点より、アンビバレント得点と回避得点がともに低いタイプ、②「アンビバレント型」：安定得点より、アンビバレント得点が高く回避得点は低いタイプ、③「回避型」：安定得点より、

表1 高校生の内的作業モデル尺度の因子分析結果

(n=577)

項目	第1因子 アンビバレント	第2因子 安定	第3因子 回避	共通性
第1因子：アンビバレント ($\alpha=.774$)				
私が思うほど、友だちは私と親しくなろうと望んでないのではないかと感じることもある。	.666	-.085	.118	.465
友だちが自分のことを裏切るような気がして不安になることがある。	.646	-.080	.193	.461
私は、人が自分を好いてくれているかが気になるほうである。	.638	.086	.004	.414
ちょっとしたことで、すぐに自信をなくしてしまう。	.597	-.059	.044	.362
私は、あまり自分に自信を持ってないほうである。	.528	-.195	-.009	.317
人に頼みごとをするとき、断られるような気がして不安になる。	.492	-.123	.093	.266
第2因子：安定 ($\alpha=.771$)				
私は、はじめて会った人とでもうまくやっていける自信がある。	-.186	.758	-.057	.612
私は、はじめてあった人とも親しくなりやすいほうである。	-.041	.744	-.038	.553
私は人に好かれやすいタイプだと思う。	-.223	.583	.125	.405
たいいていの人は、私を好いてくれていると思う。	-.273	.531	.051	.359
人に頼みごとをしたり、人から頼られたりすることを気楽にできる。	.037	.489	-.155	.265
気楽に自分のことを友だちに話すことができる。	.051	.473	-.182	.259
第3因子：回避 ($\alpha=.776$)				
相手からどんどん親しくなろうとしてくる友だちのことをイヤになることがある。	.136	-.028	.744	.572
私は、親しくされると居心地の悪さを感じることもある。	-.003	-.063	.670	.453
あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりするとイヤになってしまう。	.199	.005	.638	.447
私は、あまり人と親しくなるのは好きではない。	-.031	-.229	.624	.443
どんなに親しい友だちでも、あまりなれなれない態度をとられるとイヤになってしまう。	.098	.005	.543	.304
因子寄与 寄与率(%)	2.38 13.99	2.34 13.78	2.24 13.15	

表2 男女別の内的作業モデル尺度と入学時適応感尺度の平均および標準偏差

	男子 n=155	女子 n=311	F値	
安定	14.68 (3.11)	15.34 (3.28)	6.27 *	男<女
アンビバレント	15.12 (3.55)	16.02 (3.87)	8.53 **	男<女
回避	11.06 (2.42)	10.35 (2.42)	12.79 **	女<男
関係回避	8.46 (2.45)	7.76 (2.52)	11.85 **	男<女
親和・期待	9.90 (2.27)	10.22 (2.30)	2.84 †	男<女
不安	10.26 (2.78)	10.96 (2.66)	9.53 **	男<女

()内は標準偏差 ** : $p<.001$, * : $p<.005$, † : $<.01$

表3 内的作業モデル尺度各因子と入学時適応感尺度各因子の相関

		n=577		
		関係回避	親和・期待	不安傾向
安定	男子 (n=266)	-.188 **	.316 **	-.139 *
	女子 (n=311)	-.363 **	.277 **	-.211 **
アンビバレント	男子 (n=266)	.316 **	.061 n.s.	.619 **
	女子 (n=311)	.127 *	-.119 *	.725 **
回避	男子 (n=266)	.334 **	.129 *	.132 *
	女子 (n=311)	.344 **	-.152 **	.146 *

** : $p<.001$, * : $p<.005$

表4 内的作業モデルタイプ別の入学時適応感尺度得点平均および分散分析結果

	安定型 n=188	アンビバレント n=87	回避 n=105	混在型 n=197	F値	多重比較結果
関係回避	男子 (n=266) 7.26 (2.23)	8.00 (1.71)	8.59 (2.34)	9.51 (2.44)	13.21 **	安定<回避・混在, アンビバレント<混在
	女子 (n=311) 6.81 (2.20)	7.20 (2.39)	8.31 (1.78)	9.12 (2.51)	20.34 **	安定<回避・混在, アンビバレント<混在
親和・期待	男子 (n=266) 10.36 (2.39)	10.38 (1.70)	10.05 (2.36)	9.34 (2.15)	3.34 *	安定>混在
	女子 (n=311) 10.74 (2.42)	10.10 (2.08)	9.85 (2.07)	9.67 (2.28)	4.31 **	安定>混在
不安	男子 (n=266) 8.96 (2.63)	12.38 (2.00)	9.22 (2.45)	11.52 (2.59)	23.92 **	安定・回避<アンビバレント・混在
	女子 (n=311) 9.72 (2.35)	12.15 (1.92)	9.44 (2.16)	12.06 (2.67)	26.15 **	安定・回避<アンビバレント・混在

()内は標準偏差

** : $p < 0.01$, * : $p < 0.05$

回避得点が高くアンビバレント得点が低いタイプ、④「混在型」：安定得点より、アンビバレント得点と回避得点がともに高いタイプ。なお得点比較は、各下位尺度の項目数と分散の違いを考慮し、標準得点を用いた。なお、各タイプの出現率は、安定型32.6%、アンビバレント型15.1%、回避型18.2%、混在型34.1%であった。

IWM尺度の下位尺度の各得点をもとにカテゴリー化したIWMタイプを独立変数、高校入学時適応感尺度の各下位尺度得点を従属変数にした一元配置の分散分析をおこなった(表4)。その結果、男女ともに、関係回避、親和・期待、不安の全ての下位尺度得点において、IWMタイプの効果が有意であった(関係回避(男子) : $F(3, 262) = 13.21$ $p < .01$, 親和・期待(男子) : $F(3, 262) = 3.34$ $p < .05$, 不安(男子) : $F(3, 262) = 23.92$ $p < .01$, 関係回避(女子) : $F(3, 307) = 20.34$ $p < .01$, 親和・期待(女子) : $F(3, 307) = 4.31$ $p < .01$, 不安(女子) : $F(3, 307) = 26.15$ $p < .01$)。また、多重比較(Bonferroni)の結果、男女共に関係回避得点においては、安定型より回避型、混在型において得点有意に低い結果であった。また、親和・期待得点においては、安定型より混在型が有意に低い結果であった。不安得点においては、アンビバレント型、混在型の得点有意に高く、安定型と回避型の得点が低い結果であった。

4. 考察

本研究では、高校生の学校適応への心理教育的援助の視点を得るために、高校生のIWMと入学時適応感との関連を検討することを目的とした。分析の結果、IWMと入学時適応感との関連において、IWMの要因としての3因子(安定、アンビバレント、回避)による分析、IWMの個人特性としての4タイプ(安定型、アンビバレント型、回避型、混在型)による分析とも、IWMと入学時の適応感に有意に関連がみられる結果であった。以下、それぞれについて考察する。

IWM尺度について

IWM尺度は、先行研究(詫摩・戸田, 1988, 粕谷・河村, 2005b)と同様の安定、アンビバレント、回避の3因子構造が確認され、各下位尺度は一定の内的整合性が

確認された。また、IWMの下位尺度を用いたIWMタイプ分けにおける出現率は、詫摩・戸田(1988)のHazan & Shaver(1987)の記述をもとにした強制選択法による研究におけるsecure型(39%)、anxious/ambivalent型(14%)、avoidant型(19%)、の割合(強制選択法のため分類不能が28%)及び、中学生を対象とした研究(粕谷・河村, 2005a, 2005b, 2006)における安定型(35%~40%)、アンビバレント型(10%~12%)、回避型(15%~16%)、混在型(33%~39%)と比較的近い値であった。構成概念妥当性、再検査信頼性などの検討が不十分であるものの、得られた結果は、高校生の個人内要因としてのIWMを測定し得ているものと考えられた。

IWMと入学時の適応感との関連

IWMの各因子と高校入学時学校適応との関連では、IWMの安定因子は、男女ともに高校入学時適応感の親和・期待傾向が高いこと関連し、女子においては、関係回避傾向が低いことに関連することが示された。また、アンビバレント因子は、男女ともに入学時適応感の不安傾向が高いことと関連し、男子においては、関係回避傾向が高いことと関連することが示された。さらに、回避因子は、男女ともに入学時適応感の関係回避傾向が高いことと関連することが示された。また、IWMタイプ別に分析をした結果では、安定型は、男女ともに親和・期待傾向が高く関係回避傾向、不安傾向が低いことが示された。また、混在型は、男女ともに親和・期待傾向が低く、関係回避傾向、不安傾向が高いことが示された。

乳幼児期から形成されるIWMは、心的表象として内在化され、生涯にわたって個人の認知構造に影響を与え続ける可能性が指摘されており(Bowlby, 1988)、高校生においてもIWMが出来事の認知に影響を与え、学校適応感と関連していることが示唆される結果であった。IWMは、ストレス状態や脅威にさらされたときに活性化するといわれ、先行研究では、安定型は脅威を低く評価しサポートを求めることができ、アンビバレント型は、ネガティブな感情に焦点化しやすい傾向があること、回避型は脅威から距離を置くことで安全を確保する傾向が指摘されている(Mikulincer & Florian, 1988)。本研究の結果からは、入学時の環境移行事態においてストレスや脅威にさらされ活性化したIWMが、学校生活

における出来事の認知に影響を与えることで適応感の個人差に関連している可能性が考えられる。

IWMの安定因子は、青年期において社交性、自信、関係における自己認知の高さと関連があること（金政・大坊，2003）、思春期において対人積極性、効力感などと関連があること（粕谷・河村，2005b）が指摘されている。本研究において、安定因子が学校生活への親和・期待の要因が高い傾向に関連していたことは、IWMの安定因子が集団内での関係の認知や学校生活への効力感などの認知に影響することで学校生活に対する親和性や期待などのポジティブな認知をもつことに関連したことが考えられる。また、不安定型のIWMは、友人からソーシャル・スキルが欠けていると評価される傾向と関連があること（Kobak & Sceery, 1988）、ソーシャル・スキルの遂行の不全と関連があること（粕谷・河村，2006）が指摘されている。本研究において、アンビバレント因子や回避因子が、不安や関係回避傾向が高いことと関連していたことや、混在型において、親和・期待傾向が低く、関係回避傾向、不安傾向が高いことが示されたことは、入学時の新しい環境における関係性に移行するにあたり、不安定なIWMが、ソーシャル・スキルの遂行などの実際の対人行動にも影響することで、これらの傾向を強めている可能性についても考慮に入れる必要が示唆されていると考えられる。

高校入学時の適応を援助する心理教育的援助の視点

新入学時適応感尺度は、先行研究において、入学後3ヶ月の時点で、3つの因子のうち、全てまたは2つの因子が良好である場合は学校適応が比較的良い状態であるが、良好な因子が1つまたは0になると、学校適応が良好でないことが指摘されている（粕谷・小野寺・大谷，2006）。本研究において、これらの入学時の適応感とIWMとの関連が明らかにされたことから、高校入学初期の適応援助においては、入学時の学校生活に関する適応感について留意するとともに、IWMの視点から生徒のアセスメントをおこない、心理教育的援助の方法を工夫する必要があると考えられる。

また、思春期においてIWMの変容に友人関係や学級適応が関連することが指摘されている（粕谷，2016）。高校入学時の適応を援助する際に、入学初期にグループアプローチを用いた活動を取り入れ、友人関係や学級での適応を援助する実践（例えば、大谷・粕谷，2014）が有効であると考えられる。その際には、生徒のIWMのアセスメント結果に基づいて、心理的抵抗や関わる意欲の低さに対応した活動を工夫していくことが重要であろう。

5. 今後の課題

本研究においてIWMが高校入学時の学校適応と関連することが明らかになった、今後、さらに集団への適応や学習意欲、進路意識、問題行動など、種々の適応要因との関連について検討していく必要がある。

また、本研究では、高校入学1ヶ月後におけるIWMと適応感との関連を検討した。しかし、入学時の適応感が、その後、実際にどのように変化していくのか、その変化に関わる要因は何かを明らかにすることはできていない。入学時から適応の変化について縦断的な検討をおこない、その推移と関連する要因について検討することが課題である。

引用文献

- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss: Vol. 2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books. (黒田実郎ほか訳 1977 母子関係の理論2：分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss: Vol. 3. Loss: Sadness and depression*. New York: Basic Books. (黒田実郎ほか訳 1981 母子関係の理論3：愛着喪失 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. 1988 *A secure base: clinical applications of attachment theory*. London: Routledge.
- Hazan, C., & Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- 五十嵐哲也・萩原久子 2004 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 教育心理学研究, 52, 264-276.
- 金政祐司・大坊郁夫 2003 青年期の愛着スタイルと社会的適応性 心理学研究, 74, 466-473.
- 粕谷貴志 2016 中学生の内的作業モデルの変化と学校適応との関連, 応用心理学研究, 41, 299-307.
- 粕谷貴志・河村茂雄 2005a 中学生の内的作業モデルと学校適応との関連 カウンセリング研究, 38, 206-215.
- 粕谷貴志・河村茂雄 2005b 中学生の内的作業モデル把握の試み—尺度の信頼性・妥当性の検討— カウンセリング研究, 38, 141-148
- 粕谷貴志・河村茂雄 2006 中学生の内的作業モデルとソーシャル・スキルとの関連, カウンセリング研究, 39, 124-131.
- 粕谷貴志・小野寺正己・大谷哲弘 2006 高校入学時の学校生活認知と学校適応, 教育カウンセリング研究1, 36-42.
- Kobak, R. R. & Sceery, A. 1988 Attachment in adolescence: working models, affect regulation, and representations of self and others. *Child Development*, 59, 135-146
- 小泉令三 1992 中学校進学時における生徒の適応過程 教育心理学研究, 40, 348-358.
- Mikulincer, M. & Florian, V. 1988 The relationship between adult attachment styles and emotional and cognitive reactions to stressful events. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford.
- 文部科学省 2014 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査

大谷哲弘・粕谷貴志 2014 高等学校入学時における学級適応を目的としたグループアプローチプログラムの検討, カウンセリング研究, 47, 96-107.

詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論からみた成人の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み— 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.

Wapner, S., Kaplan, B., & Cohen, S.B. 1973 An organismic-developmental perspective for understanding transactions of men in environment. *Environment and Behavior*, 5, 255-289.